

坂上大嬢、秋稻の縵を大伴宿禰家持に
贈る歌一首

一六二四番

我が蒔ける 早稲田の穂立 作りたる 縵を見
つつ 偲はせ我が背

大伴宿禰家持の報へ贈る歌一首

一六二五番

我妹子が 業と作れる 秋の田の 早稲穂の縵
見れど飽かぬかも

また、身に着る衣を脱きて家持に贈りしに報
ふる歌一首

一六二六番

秋風の 寒きこのころ 下に着む 妹が形見と
かつも偲はむ